



ラジオ文化の魅力

著者	吉村 直樹
雑誌名	文化情報学
巻	4
号	1
ページ	29-38
発行年	2009-03-20
権利	同志社大学文化情報学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000012255

講演記録

ラジオ文化の魅力

吉村 直樹 (ラジオ大阪 制作報道部記者)

本稿は2007年12月15日12時40分よりMK 301教室にて行われた同志社大学文化情報学会2007年次大会で特別講演をしていただいた記録です。

阪田：2007年度年次大会を開催いたします。私、総合司会を務めさせていただきます、同志社大学文化情報学部講師の阪田と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。それではさっそくプログラムのほうに進めさせていただきます。最初に開会の辞を、文化情報学部長の村上先生より賜りたいと思います。よろしくお願いいたします。

村上：皆さま、こんにちは。第2回大会の開催にあたり、ひとことごあいさつさせていただきます。文化情報学会というのは、一昨年4月の文化情報学部設置と同時に設立されました。1年目は学会誌の『文化情報学』の発刊という事業をおこないまして、昨年この『文化情報学』を発刊、と同時に第1回の大会を開催いたしました。今年は第2回の大会となるわけですが、今回は、ラジオ大阪の吉村直樹さんが特別講演を引き受けてくださいました。ありがとうございます。厚くお礼申し上げます。

文化情報学というのは、文理融合の学問・研究を目指す新しい学問分野です。そして文化情報学会というのは、この新しい学問分野の中心となる学会で、この学会の発展というのが文化情報学の発展につながります。そういう意味で、この大会を大事にして、学会を育てていきたいと思っています。

文化情報学部は、この4月に大学院を設置して、現在、博士課程前期に5名、後期に4名の大学院生が研究をおこなっております。本日は特別講演の吉村さんの講演に加えて、後期課程の大学院

生4名が研究発表をおこないます。学部の学生諸君にとっては、大学院生がどういう研究をやっているかというのを知る良い機会だと思います。また、来年からは卒論に入るといって学生がたくさんいるわけですが、今大会の特別講演や大学院生の研究発表が卒業研究に大きな刺激になればと願っております。

最後になりましたが、この大会の開催にご努力いただいた先生方にお礼を申し上げ、開会のあいさつとさせていただきます。

阪田：村上先生ありがとうございます。それではこのあと、さっそく特別講演のほうに移りたいと思いますけれども、それに先立ちまして、ラジオ大阪制作報道部記者でいらっしゃいます、特別講演の講演者としてお招きいたしました吉村直樹様のご紹介を、本学教授の田口哲也先生のほうからさせていただきます。田口先生、どうぞよろしくお願いいたします。

田口：皆さん、こんにちは。吉村さんの略歴、ちょっと、ここに、前に映しましたですけども、大阪生まれで、あとで話を聞くとすぐ分かりますが、こてこての大阪弁ですので、大阪弁があんまりフルエントでない方にはちょっと分かりにくいところがあるかもしれません。それで、ラジオ大阪でずっと、ここにちょっと出てくるんですけども、ざっと挙げただけで幾つも賞をお取りになっている報道記者であり、なおかつ制作者であります。

このラジオというのは、僕なんかの世代は日常

的に使っていた機械なんですけど、多分、学部の皆さんは、この間、実はドイツのラジオ局の人に、私の授業に来て話をしてもらったんですけど、ラジオ番組を聞いたことがないという人がほとんど、8割ぐらいです。ラジオという機械そのものを見たことがない人っているかもしれないんですけども、ラジオの魅力というのは、これからももちろんお話ししていただくわけですが、よく言われるように、新種の生物が来たら、ほかの生物全部そいつが食い荒らしてしまわないで、ちょっとこう残すというふうに、例えば古いメディアとか古いジャンルというのは、ずうっと残っていくわけですね。そうでないとクラシックとか、そういうジャンルは消えていってしまうわけですから。そういう意味では、ある種確立された、音の放送文化の面白さというのがあるはずで、これは、ここで学ぶ皆さんのなかで、自分の研究に直接刺激になる場合もあれば、間接的に自分の関心領域を相対化できるというきっかけにもなるんじゃないかと思ひまして、番組を実際に制作しておられる現場の吉村直樹さんに来ていただきました。

ということで、では、さっそくですがよろしくお願ひいたします。

阪田：田口先生、どうもありがとうございました。それではさっそく特別講演のほうに移りたいと思います。「ラジオ文化の魅力」というタイトルで、ラジオ大阪の吉村直樹様より講演をいただきます。吉村先生、どうぞよろしくお願ひいたします。

特別講演

「ラジオ文化の魅力」

ラジオ大阪 制作報道部記者
吉村 直樹氏

あ、どうも、初めまして。今紹介していただきました、ラジオ大阪の吉村といいます。田口先生とは、先月でしたか、同志社のある場所で、僕のラジオの現場での話みたいなことを聞いていただいて、ちょっと関心を持っていただいたということで、また今日、またこちらへ呼んでいただいたんですけど。

僕自身は、今ちょっと先ほど出てましたように、ラジオ大阪という放送局におります。ラジオだけ、ラジオ単営社とって、ラジオだけ、テレビはな

してラジオだけでやってる会社なんですけど、僕が入社したころ、ラジオというのは非常に全盛時代、非常に、どうか、もうみんなが聞いてたみたいなことなんですけど、その後ラジオ自体が、新聞、雑誌、テレビと、数々あるメディアのなかでは、ちょっと今落ち込みつつあるということなんですけど。

僕自身は、ラジオ大阪入社というのは1970年のころですから、もう36、7年、このラジオの世界に仕事しているんですけど、僕自身は、ラジオというのは非常に面白いし、ラジオはもっと見直されていいメディアだとずっと思っていますし、またこのラジオ、もう一回皆さんにも聞いてもらうためにはどうしたらいいんかないかということをいろいろちょっと考えてるところなんですけど。今日はそういうことも含めまして、ちょっとお話しさせていただければと思っています。

このなかには将来マスコミを目指そうとしている方もおられるかもしれないんですけど、民放の放送局というのは、僕は今制作報道部というところにおるんです、これももともと制作部と報道部というのは別々の部署やったんです、最近放送局内でどんどんリストラが進んでまして、制作と報道一体化するみたいな、そういうなかでのセクションになってるんですけど。僕自身はそのなかで、番組づくりもできるし、取材活動もできるから、僕自身は楽しんでやってる部分があるんですけど、ただ身体が一つしかないというので、時々、どっちのほうに重点を置こうかなと困るときもあるんです。

このなかで、例えば取材活動、報道を目指す方とか制作活動されたい方、それでゆかれた場合、民放に入られた場合、必ずしもそのセクションに入れるとは限りません。特に民放のなかの場合は人事異動というのが定期的にあります、制作に回される人もおるし報道に回される人、ほんで一方で、やっぱり総務であったり編成であったり営業であったり、そのようなセクションありますから、必ずしもだから、私は報道志望だということで入社しても、社長秘書室みたいなところに回されるケースもあるし、また何年かしたら自分の希望してるセクションに回ることもあります。

そのへんが、だから新聞さんの場合は、例えば取材記者として入社した場合、編成局というところで取材だけでいけるんですけど、テレビ局とかラジオでも、僕らが入社したころはやっぱりそう

いう風潮がありました。だから、僕が入社したときには、制作部のなかには、もう制作一筋でずっとやってきたみたいなの、その人に聞けば制作のノウハウはもうすべて知り尽くしてるし、どうということするにはどういうタレントさん、どういう人と接触すればいいとか、そういうことにも精通した、ほんまの職人みたいな人がいましたし、ラジオの場合、効果音というのが大切なんで、いろんな音を、耳で聞いたときにそれをそれらしく聞かせるような効果音という。だから、大砲の音やったら大砲の音をつくる人とか、カエルの鳴き声を、貝のぎざぎざでギツギツってやったらカエルの鳴き声になるとか、それからちょっと、ぐううっと、なんか、ドンゴロスみたいな布があって、それをぐうっと、その木の杵を回すと風の音が。ほんで、それ強く回すとすごい猛風を、弱く回すと微かな風とか、なんかそんなことを調節したりして音を。

僕が入社する前はそういう、ラジオ局なんかでは、それをやれる人というのはすごい高い評価いうんかな、持ってはったんですけど、今だんだんそういうのなくなって、今そういうほんまの職人的な仕事する人が、僕らが入社して、そのころから、もう30年ほど前からどんどんそういう人が消えていって、ラジオのスペシャリストから、ラジオの人間はゼネラリストにならないかんねんいうことで。

僕自身も、僕はもともと報道とか制作やりたくて入ったんですけど、やっぱり一時営業に回ってたときもあるし、それから営業推進部というところへ行ったりとか、それからスポーツ担当とか、いろんなことをやってきてます。ここ10年ほどはずっとこの制作報道というところでおまして、ほんで毎年1回ぐらい、ちょっと自分なりにドキュメントつくってみて、そういうのが先ほど紹介していただいたように、ちょっと評価された分があるんですけど。僕自身は、日常的には、仕事としてはそういうこともやってるんで。

ただ、もう一つ、土曜とか日曜では、休みの日を利用しては、ちょっと地域の活動みたいなことやってまして、今は、「田辺大根ふやしたろう会」というそういう、僕は大阪の東住吉の北田辺いうところに住んでるんですけど、そこに江戸時代から有名な伝統野菜、田辺大根という大根があって、それが、ここ近年、もう幻の野菜になっていたんですけど、その種が2000年ぐらいに、まあ残っ

てるということで、それを今地域のの人らと一緒に復活栽培するようなこと、普及することを今やってたりしています。

そのほかに、この地域で田辺寄席という寄席があって、これは地域寄席としてはもう33年間続いている寄席なんですけど、関西の、今落語家さんって、だいたい200人ぐらいいてはるんですけど、田辺寄席に出てない落語家さんは、もう2~3人ぐらいの、米朝さんとか、もうそのへんぐらいの数人だけで、たいていの噺家さんは、この田辺寄席を皆経験してるというふうな、出てもうてるというふうな、そんな寄席にもかかわってます。

ですから、僕自身そういう地域の活動を通じてると、けっこういろんな人と知り合って、地域の情報とか話題が、その地域活動することのなかでいろんな人と知り合っていて、ほんで、やっぱり世の中にいろんな人がいると。こういう人はこういうことやってる、こういう情報持ってるはるみたいな、なんかそういうことを得るということで。

ときたまラジオの情報だけで収まらないような情報があったら、ときどき新聞社の人に、「あ、こんな話ありませ」とか、「こんな話題ありますよ」とか、テレビ局の人に、画像的に面白い話やったらテレビ局さんのほうへ紹介したりみたいな、けっこうそういう地べたな情報収集なんかに役立ってるというか。僕自身が今までつくってきたドキュメンタリーなんかも、ちょっとそういうことから得た情報でつくったような番組がけっこうあります。こういうところで、ちょっと前段の話が長なってしまったんですけども。

今日は、ラジオメディアということと、日本の文化ということから起こしてちょっと話進めたいと思うんですけど、今日もう僕お話しすることは、もう皆さん、学術的にもものすごくアカデミックなことされてるんで、もう、「なんや、そんな頼りのないこと」と思われるかも…、まあ僕自身がちょっと現場で得てきたことを話していくということで、気楽に聞いていただければと思ってます。

人間は物事を知るということのなかでは、人間の持つてる感覚、普通一般に五感と言われるものがあります。だから視覚、見ること、それから聴覚、耳で聞くこと、口で味わう味覚、そして臭覚、鼻でかぐ、そして、手で触ってとか肌で知って感覚する、触覚。そうした感覚でもって物事を認知して、頭の中で分析していくわけですけど。

特に日本人は、この耳で聞く、聴覚による鋭敏さというのが、非常に格別なもん持ってらんじゃないかなという気がするんですね。というよりか日本人だけじゃなくて、人間はもっと、現代人よりか昔の人のほうが非常にもっと聴覚を、それらの感覚というのをもっともっと大事にして、そこから研ぎ澄まされたもんを得てたんじゃないかなという気はするんですね。

特に聴覚の世界でしたら、日本人でおなじみの俳句でいきますと、「古池や蛙飛び込む水の音」という俳句ありますね。これはもう芭蕉の有名な俳句なんですけど。これなんかでも、ほんまに静寂な、何も聞こえない古い池の中で、蛙がポチャンと飛び込む。そのことからもちろん情景を17文字のなかへ表現してるわけですね。

もう一つ、「閑けさや岩にしみ入る蟬の声」という俳句がありますね。これなんかもすごく、この静けさのなかで、そこをぱっと、その静けさを破るようなセミの音が。で、そのセミの音が「岩にしみ入る」というふうなね、なんか、ものすごい奇抜な表現で、この音の感覚という、音の世界を表現してきてるわけですね。だからこれを、17文字でこれだけのことを表現できるというのはやっぱりすごいなと思うんですね。

日本には、古くから和歌とか万葉集というのがありますが、これは、今僕たちはこの和歌とか万葉集というのは、書物で、字でもって見るわけなんですけど、本来これは耳で聞くもんやったわけですね。だから日本人のなかではもともと、文字というのはその時代ありませんから、和歌など、今宮中で歌会始とかされて、ああいうふうにならずと朗々と詠むことによって、それを耳でもって聞いてその感覚を楽しむということやったわけですね。万葉集なんかでも、文字のない時代に漢字を借りて万葉仮名で表記されていったというふうなことですね。

それから、日本最古の歴史書で、『古事記』というのがありますが、これも太安万侶（おのやすまろ）が、文字として表記する前というのは、いわゆる、口でもって伝えられてきてるわけですね。だから語ることによってどんどん、だから、文字のない分すごく記憶力というんか、暗唱力というのはすごく強かったと思うんですけど。ほんまにやっぱりそのこと、太安万侶が文字に表記して、それによって『古事記』というのが今でも、僕たちが知ることができるわけなんですけど。読むこ

とができるわけなんですけど。

だから、日本人にとって文学というのは、本来口承、口で伝える文学であって、読むもんじゃないはずなんです。耳でもって聞いて楽しむ。特にそういうことが七五調の文章という、日本人にとって非常に内律的にもものすごい、なんか、取り込みやすい語調でもって耳に入るというふうなことが、日本人にとって非常に気持ちよさに通じるもんがあったと思うんです。

それから中世になって、もっと庶民的な世界が広がってくるわけなんですけど、その段階でも、多くの方はまだ文字というのを読み書きできません。知りませんから。そのころ寺院なんかで僧侶が語る絵解きであったり説経節というふうなものがあって、それから山伏がずっと流布しながら流していく祭文節（さいもんぶし）という、こうしたもんが、多くの方は耳でもってそういう物語とかお話、だから宗教的な、なんて言うんですか、地獄極楽話であるとか、因果応報等であるとか、諸行無常といった、そうした考え方というのは、そういう言葉を通じて得ていったということだと思っただけなんです。そのなかで、社会のなかの、こういうことしたら地獄に落ちるぞ、こういうことしたらいい功德して極楽行けるよ、みたいな、そのなかで人間の善悪というのを、そういうふうな、自然にそういう社会的な規範として得ていったと思っただけなんです。お能なんかで歌われる謡曲も聞くものやったわけですね。

中世に三味線が日本に伝わってきます。この三味線というのは非常に手軽な楽器、扱いやすい楽器ということで、この三味線に乗せていろいろな文芸がまた発達してきます。浄瑠璃なんかもそういうもんなんですけど。そういうなかで、お寺や神社などで、人の集まる場所で、結局面白噺とか滑稽噺とかを聞かせる話芸が発達してくるわけですね。そういうのが、今の落語とか講談とか浪曲の土台になってるわけでありまして、そういうなかで、もっと、どういうんか、その話芸のなかで、人間の義理人情であるとか、勧善懲悪、いいことを勧めて悪を懲らしめるとか、それから義侠、男伊達というんですか、強きをくじき弱きを助けるみたいなね。そうしたことが語られて、やっぱりそれが日本人のある種道徳観みたいなものは、その庶民的なレベルでそういう口伝え、その噺とかそういうのを聞くことによって、人間関係はこんなもんだと、そういう大衆芸能自体が日

本人の社会生活の規範みたいなものを教えていったみたいな部分があると思うんですね。

ですから今、社会のなかで、いじめなんか起きてるんですけど、これなんか逆に、強きに従って弱きを、くじくみたいなね、なんか、ほんとに人間として本来あるべき姿とは違うかたちの。ですから僕はもう、昔のほうが自然とみんな、その人間のなかでどうしていったら、いいかたちの生活が、いい社会ができるかみたいなことを、自然と庶民のなかではそういうことがつくられてたんじゃないかなというふうな気がするんです。

そうしたお断をするということ、だから、もともとそういうお寺とか神社とか、言うたら舞台装置も何もないところで、もう話術だけで人を引きつけないかんわけですから、その話しかける人は相当な話術が必要なわけですね。

僕ら昔、よく大阪の新世界とか、そこに洋服のたたき売りなんかする店があったり、もっと昔はバナナのたたき売りとか、ガマの油売りとかですね、そういう人たちはもう大道で、通りがかりの人を自分の声一つで集めて、何十分もそこに集中させて立ち止まらせるみたいな、そういう技術みたいなものを持ってたわけですね。

そういうなかで、聞く人は聞く人で、その話を聞きながら、だからそういう話とか物語があったとしても、それを、背景に別に舞台があるわけでもないですから、聞く人自体がその話していることを、想像で補って楽しんでいくわけですね。

ですから落語を例に取っていけば、落語というのは別に、後ろについたてがあったりとか、なんか松の絵が書いてる程度の話なんですけど、結局そのなかで噺家さんが、「ここは今舟の上です」言うたら皆、もうそれは舟の上なんだと、やっぱり聞いてる人自体がそういうふうにイメージしていきますし、ほんで、「ここは長屋ですよ」言うたら長屋で、「ここは花見の会場ですよ」、「今冬の景色ですよ」、「今冬です」、「池田に猪（しし）買いに来ました」言うたらやっぱり池田の産地を想像していくみたいな。だから、聞く人自体が想像していくわけですね。落語の場合やったら、小道具としてはいわゆる扇子と手ぬぐいだけなんですけど、結局そこで、扇子で手ぬぐいをちょっと紙みたいな感じではあっと書くふりをすると、あ、これ、今手紙を書いてるんやとか、扇子で槍をしごくような格好すれば、「あ、これ、今槍をしごいてるんや」とか、舟をこぐような格好すれば、

「それは舟をこいでんねや」と。それはもう多分に、だから聞いてる人が、自分でどどんイメージして、想像して、補って楽しんでいくというふうな芸術なわけですね。

だからもっと象徴的な、そういう大衆芸能以外の、室町時代の武家なんかで、はやったお能にしても、能舞台というのは別に、後ろに、もうその松の絵が描いてる程度で、ほんで演じる人が、なんか象徴的に、ここは何々です、「安達ヶ原です」とか何とか言えば、「ああ、もうそういう、寂しい、何もない野原なんやな」みたいなこと思い込むみたいな。だから日本人は昔から、耳で得たことを自分で想像して膨らまして楽しんでいくということに慣れ親しんできたということだと思います。

人間というのは、先ほど言いましたように五つの感覚、五感を持ってんですけど、一つの機能が欠如すると、逆に、別の機能がそれを補助するために非常に優れて発達するというか、研ぎ澄まされてくるみたいなのところがあって、僕は以前あるドキュメンタリーで、もう生まれつき、先天的に目が見えない人のことをちょっと取材したことがあるんですけど、彼と一緒に取材をずっと回ってて、あるとき地下鉄に乗ろうとしたときに、電車が入ってきたら、彼は、「あ、これは何々の何々の型の車両ですね」というようなことぱつと言うんですね。彼は、だから、目に見えないけど、それぞれの型の車両のモーター音を聞けば、これは何型の車両やというふうなことを聞き分けるぐらいの耳を持っているわけですね。だからそれはもう僕らが聞いてて、なんか電車が入ってきたら、どんなに車両が違ってても皆同じような音に聞こえるのが、彼のなかでは全部それ区分けができるわけですね。

彼は野球が好きだから、あるときちょっと野球の試合前のベンチサイドのそこへ彼を案内して、で、見てて。彼はその横に行ってて、有名な外国人選手の素振りとか、日本人選手の素振りの音を聞いているときに、「あ、これはひょっとしたらあの選手ちゃいますか？」みたいなことを言うのね。で、やっぱりその外国人の、やっぱりすごいです、その振りの風を切る音みたいな。そのなかで、彼はもうそれでぱつと聞き分けてしまうみたいな。それほど、なんか、すごい。

だから僕らが持ってないもんを逆に、一つのハンディを持ってると人は、なんかそれをやっぱり補うような感覚を発達させるみたいな。今どう

か知りませんが、京都のオムロンという会社がありますけど、そこは逆に障害者の人たちが雇用して、その人が持つ能力というのを、逆にいろんなところで活用してるというふうなことも聞いたことがあるんですけど。

僕は、もう一つちょっと不思議なのは、彼は野球が好きなのですね。だから僕らは野球というもんは、実際グラウンドを見て、1塁、2塁、3塁、ほんで内野、外野があつてみたい。彼は、もう生まれつき目が見えないから、彼のなかでは野球というのはどういうふうなグラウンド風景、グラウンド自体も彼が想像できるのかどうか。彼のなかで野球というのは、楽しんでるけど、彼は野球というのをどういうふうなイメージでもって楽しんでるかなみたいな、そういうところがちょっと非常に興味があるんですけど。

ちょっとここで音を聞いてもらいましょうかね。彼は目が不自由なうえに、もう一つ腎臓も痛めて、人工透析もせないかんということで。そのなかで彼は生きがいとして、俳句をつくるということを、まだ24、5歳の子なんですけど、俳句にもものすごい興味を持って。で、彼自身が俳句のなかで、なんか、青という色を読み込んだ俳句をつくってるんですね。彼のなかでは、先天的に色がない世界にいるから、その青とか赤とかいうのがどういう区別をしてるのか分からないけど、なんか、そのなかで彼は、その色を読み込んでるみたいな。

――再生開始――

「軟風の、枯れ野に青を運びけり」。「軟風の、枯れ野に青を運びけり」。軟風とは、肌に心地よい柔らかい風のこと。作者は、春も間近い淀川に沿って歩きました。河川敷を渡る軟風に、枯れ草の底から青草が芽を出し始めました。色彩を超えた心象の青なら、ピカソやシャガールの青に見られます。ここでの青は、ためらいや、陰りを含みながらも、確かに存在する青草の香りを青と言いました。

――再生終了――

昔から人間は一つの機能を閉ざすことで、新しい感覚を得られることを知っていたようです。サッカーも手を封じて楽しむゲームです。片足でぴょんぴょんぴょんぴょん飛ぶことによって、そのケンケンする面白さみたいな、子どもながらに

知ってるし、目隠し遊びとかそういうふうなことで、何か一つの感覚を喪失することによって何か別の感覚が生まれてくるみたいな、そういうことも人間としては楽しむ術も知ってたんじゃないかなというふうに思うんですね。

そういうなかで、日本人のなかでは、昔から音によって楽しむ文化というのがつくられてきたと思うんですけど、ラジオというのが、これが出てきたのは、今からまだ100年ちょっとほど前です。もうその間に、この電波の技術というのは非常に進んだわけなんですけど。だから無線でこの音が伝わるということは、ものすごい画期的なことなんです。だからそれ以前はみんな伝書鳩であったり、のろしを上げたり、もうとにかく早飛脚みたいななんが行ってみたい。そうでないと遠方のものを伝えることはできなかったんです。僕は線があつても伝わるということはやっぱりすごいと思うんですけど、それが無線で。

今、もう皆さん携帯電話が普及してますから、僕らも昔、だからまだ電話機で、線があるから、なんか伝わるいう、何となく分かるんですけど、この何にもなしのところで、もう空中を通じてこの音がどンドン伝達できるというのは、やっぱりすごいことやなという。まあ、それが当たり前になってしまってるんですけど。

だから20世紀というのは、一つはやっぱりラジオの世紀やったと思うんですね。だからラジオを通じて、この空中でいろいろ電波というのが通つて、それを通じて音声伝わることをイタリアのマルコーニという人が発見しました。

無線のラジオが発明されて、そのことで、あることが瞬時に多くの人に伝えることができるということで、20世紀はそういうなかで、いろんな政治家であつたりいろんな人、娯楽としてもラジオは使えたり、政治的なプロパガンダの道具としても使われたわけですね。それを一番最も友好的に使ったのがヒトラーであつたり。

ヒトラーは、だから、彼の演説はどンドンどンドン、熱狂的な演説を、聞いている人を興奮させるような演説をしていくわけですが、それは彼がラジオを使ってそれをやっていってドイツ国民を戦争に煽つていったみたいなのところがあるんですけど。そのほかにラジオというのは、スポーツとかニュースとかいろんなもん、20世紀にいろんなかたちで伝えてきたということで。

そのなかで戦後、テレビというのが出てきて、

テレビは画像がつくということで、それも動く画面がつくということで、それ以降はテレビが中心の時代になって、もう皆さんの場合はそっちのほうに。僕はまだ子どものころというのはテレビというのはなかったから、もう子どものころ、表で遊んでも、ラジオで人気番組があるいうたら、もう外からすうっと飛んで帰って来て。そのころラジオといっても、もう家のなかにでんと大きなラジオ受信装置があって、家の人が皆ラジオの前に座ってラジオを聞くみたいなね、そういう時代やったんですけど。そういうなかでラジオをやったり楽しんで。

ところが今、そういう画像のあるテレビがどんどん普及してきたなかで、ラジオの存在価値自体が、ちょっとなんか薄れてきてるみたいな感じがするんです。ただ、僕は画像がないということ自体がラジオにとって短所かと言えば、僕はある意味では逆にそれはラジオの長所じゃないかなというふうにずっと思っています。

というのは、それは、先ほども出てきましたように、人間にはものをイメージする力というのがあって、ほんで、画像を見てしまうと、その画像で自分の想像力がもう制限されてしまうわけですね。だから、もうその画面でそのもの自体が固定されてしまうということ。だからそこから自分の想像力が広まっていけないわけですね。

ですから、僕はいろいろ取材のなかでインタビュー活動とかするんですけど、テレビでいろんなインタビューとか見て、そのときは、その人の表情とか画像を見て、そのなかでその人のしゃべってる言葉と語ってる表情とで、その人は本当は何をしゃべろうとしてんのかみたいな、それを聞こうとするんですけど、どうしてもやっぱり画面の、その人のしゃべってる顔のほう、表情のほうにわりとつられてしまって、その人のしゃべってる内容自体は、どっかちょっとやっぱり薄らいでしまってるみたいなところがあるんですね。

僕は、いろんな人のインタビューをして、ラジオで聞く場合、逆にその人の顔が見えない分、その人の話してる内容、その話してる口調を、一所懸命それを聞き取ろうとする。そのなかで僕は逆に、テレビでは伝わらないその人の内面がとか、心が、ラジオを通じて伝わってくるというふうに、僕はずっと今でもそう思っています。ですから、そういう意味では僕、ラジオというのは非常に、聞く人がイメージする力を、想像力が豊かであれば

あるほど楽しむことができると思う。

今最近映画なんかではハリー・ポッターなんかあって、ハリー・ポッターの、本で読まれてる方と映画になってから見る方。映画は映画でまた映像化されてる分、楽しい部分があるんですけど、逆に本を読んだときは、もっと自分で、想像力で、ぱっとその書かれてる内容をものすごいイメージ膨らますことができるけど、結局画面で見ると、「あ、なんや、ここまでのもんなのか」とか、あるいはそこで固定してしまうみたいなのところがあります。だから、そのなかで人間が持っている能力が閉ざされるか、もっとさらに深まっていくかの差というのは、ラジオはそれができるメディアだと思ってます。

それからラジオは、実際にやっているなかでは、非常にシンプルなんで、いろんなことを簡単に情報を送れる。だから、テレビは中継車がないとなかなか伝えられないことを、ラジオの人間は、もう現場に行ってそこで携帯電話とか、もう電話があれば即座に口を通じて、それを電波を通じて流すことができますし、それから、よくあるのは、災害のときに、AC電源が切れたときということで、そういう災害状態のなかでも非常に強いということ。

それとラジオの場合は、一方的に情報を送るのではなくて、2WAY、だから、聞いてる人から、昔はよくおハガキでその紹介、今は最近メールであるとかファクスであるとかそういうのが。聞きながら、一方で、同時にそういうことが伝わってきて、それを、お互い双コミュニケーションしながら番組を進めたりすることができます。

それと、ラジオで僕らがやる時、最初に初歩的に、大切に言われるのは、ラジオを聞いているとき、ラジオはマスなんだけど、一人一人に語りかけるというメディアなんですね。だからラジオでしゃべるとき僕たちは大体、「皆さん」という言い方はできるだけ避ける。だからラジオは、「あなた」というかたちでのしゃべり方。だからラジオを聞いている人も、自分に語りかけてもらおうと。ほんとはいろんな人に語りかけているんだけど、聞いている人は、自分に語りかけてもらっているような感覚を味わえるメディアの部分があります。

だから語りかけてもらってるということのなかで、ラジオの出演者と聞いてる人が、非常に深い関係と言うんかな、非常に親密な関係になれるメ

ディアなんですね。それが典型的に現れたのが、阪神・淡路大震災のときに、神戸とか阪神地区の方、被災されて、避難所とか、あるいは壊れた家の中で閉じ込められたわけですけど、そういうなかで、あのときは1月ですか、寒いところで、避難所の中で、もうみんな冷え冷えとしたところで過ごしていたわけですが、そのときに、やっぱりラジオを通じて、当時神戸ではラジオ関西さんという放送局があって、そこはもう壊れた社屋の中から情報をずっと流しはったわけですね。安否情報とかいろんな情報を流して。そのなかで、避難所にいる人たちがラジオを非常に頼ったわけですね。そのときに、ラジオから流されるいろんな情報、まあそら、ライフライン関係に関する情報はいろいろ流されたんですけど、結局聞いている人がラジオでものすごい和んだのは、いつもなじんでたあの人の声が聞こえてくるという、なんかそのことだけでみんな安心感を得たという。だからその情報の中身じゃなくて、日ごろなじんでるあの人の声が今、私のほうに語りかけてきてるという、そここのところ非常な安堵感、安心感を与えたというのが、やっぱりラジオの効果があったというふうにラジオ関西の担当者がずっと言っていたのを非常に印象深く思っています。

それから今、NHKのラジオの深夜放送で、『ラジオ深夜便』というの、これなんかも、これから団塊の世代、高齢者の人たちが、夜中に孤独な状況のなかで、アナウンサーが自分に語りかけてくるように、それでいて、いろんな知識、情報が入ってくるみたいな。そういうなかでもやっぱりラジオとしての存在価値というのは、僕はそのところにあるんじゃないかなという。

ただ、今ここにおられる方、若い方に、最近ラジオ聞いている方っておられます？最近のラジオは聞く？あのね、僕らのころは、もうほんまね、もうラジオというのが、ラジオ聞いてないとみんなから取り残されるぐらいの一つのヤング文化、若者文化みたいなところあったんですけど、今逆に若い人たちはもうテレビとか映像、テレビゲームであるとか、いろいろなゲームがあって、もう映像のある世界、それ非常に派手派手しく楽しい画面が見えるようになってしもうてるから、そこからもうみんななじんでしまってるから、ラジオに接する機会のないまま育ってきてはるんですけど、僕はぜひ、もう一度ラジオというのを、若い人もちょっと見直して聞いていただきたいとい

うふうにずっと思ってるんですけど。

それと、僕は、先ほどラジオというのはイメージを膨らますという。最近脳の科学というのは非常に進んで、人間の脳の役割みたいな。で、右脳と左脳の役割というのをよく言われますね。右脳というのは、いわゆる人間の情感・情緒、だから直感とかひらめきとか芸術性とか創造性をわりとつかさどる脳で、左脳というのが言語とか計算とか論理的思考をつかさどる脳というふうに言われています。この文化情報学会というのは、この右脳と左脳の役割を両方合体させてるみたいな学部だと思うんですけど、もう僕は、やっぱり人間のなかでその両方が非常にバランスがとれないとだめだと思うんです。

僕ら、今教育のなかでは、やっぱりどうしても言語とか計算とか論理思考のほう为重点になってきて、この左脳を使う思考というのは、緊張とか集中力が続くとイライラとしてくるみたいな、非常に緊張に対して、なんか、持続に対して弱い。だから最近若い子どもたちがよく、すぐ切れるとかなんかいうのも、ちょっとやっぱりそのへんの左脳中心の勉強とか、なんかそっちが進んでるからじゃないかなみたいな気がして。そういうなかで、僕はもっと右脳を働かすようなことをして行って、もっと人間の持っている情感とか情緒みたいななんをもっと大切にしていこうということが大切なんじゃないかなというふうに思っています。

そういうなかで、先ほど言いました、人間の持っているイメージをずっと膨らます。ほんで今の人間の情感とか情操を促進する機能として、僕、ラジオというのは非常に持っているんじゃないかなということで、ぜひ若い人も、それから昔ラジオを聞いてた人も、ぜひやっぱりラジオの世界に戻ってきてほしいなというふうに思っています。

情報の「情」という字があるんですけど、これは「情」というのは、物事の有様とか、事の実情みたいなことで「情」、それを伝えるということで情報なんですけど、もう一つ、その情報の「情」というのは、意味としてはもう一つ、これはりっしんべん、心を象徴するりっしんべんという偏ですね。だから人間の心の有様という、情けであるとか心の有様という。僕はやっぱりラジオは、幾つかメディアがあるなかで、僕はその心のほうを表現、伝えることのできるメディアではないかなというふうに思っています。ぜひ皆さん、ラジオを

もう1回見直して聞いていただきたいなと思います。

それでは、ちょっといろいろな音を、時間まで聞いていただくことができたかと思っます。日本人は、昔から音に対する感覚というのはすごく持っていて、例えば、普通人間の感覚で聞けないような音も、日本人はそれを音に表現しようとしているんですね。例えば雪の降る音というのは、実際はあんまりないはずなんです。でも歌舞伎とか落語の世界のなかで、雪の降る音というのは、そのとき背景を、太鼓とかで表現するわけですね。

(太鼓の音)

なんか、これは、なんか日本人が感覚でとらえた雪の音。冬のどんよりしたところでのその雪が降るといようなイメージが。だからこの音が鳴ると、芝居とか落語のなかでは雪のシーンということになりますね。

それともう一つ。幽霊の音って、幽霊って、実際見た人はこのなかにはいますかね。幽霊はもうほとんど見たことない人が多いと思うし、実際昔から見た人も。ただ、幽霊の出るときの音というのは、皆さんよく知ってるこういう音があるわけですね。

(太鼓の音)

こういうのがやっぱり幽霊が出る時の音と。もうこれはなんか、皆さんもこの音、「聞いたことあるで」みたいなね、思うんです。それともう一つ、ラジオの場合いろんなイメージ、まあ擬人法いうて、実際人間でないものを人間のように語らせる方法を使うことがあるんです。

これは僕、ちょっとある地元にある大きなクスノキ、それをテーマにドキュメンタリーをつくったときに、そのクスノキにちょっと語らせたんですけど、そこどころ、ちょっと聞いてください。

――再生開始――

はあ、ええ天気やなあ。へえ。今日もさんさんたる太陽がわいに降り注いでます。鳥たちがさえずってます。東のほう眺めると、生駒の山並みが、ほんまきれいにくっきりと見えます。わいはここに、ずうっと立ってまんねや。ちゅうても生半可な時間やおまへんで。はるかな時間だす。

あいまいな言い方ですけど、数百年ですか。わいが立ってんのは、今の言い方しますと、大阪市東住吉区北田辺6丁目という土地の一部だす。大阪市の南部。天王寺と長居公園の中間ぐらいの場所言うたら分かりやすいでっしゃろか。あ、申し遅れましたな。わいは、クスノキだす。

クスノキでも、わいのように何百年と生きてくると、ちょっと幹の周り、見てもらえまっか。だいたい3メートルはありますかなあ。大人2人でも抱えきれまへんなあ。根元はというと、巨大な龍が足で獲物をつかむように、四方八方に伸びた根が大地に張っております。幹の肌といいますと、これも龍のうろこのようにひび割れてまっしゃろ。ところどころ、緑の苔がむしてまっしゃろ。ちょっとわいの頭、見上げてもらえまっか。高さ十数メートル。無限に広がる空を埋めるかのように、幹から複雑に分かれた枝がくうねくねと、抽象的な屈曲をしながら四方へ伸びております。その枝のいたるところから葉っぱが生えて、ま、かっこよう言うたら、湧きたつ緑の雲ちゅうやつですか。うっそうたる空中の茂みをつくってます。

戦後間もないことでした。私の根元間近の家に住みだしたアシハラミヨコはん。今80歳になってはりますが、この方がわいのことをこう言うてはります。

アシハラ：へびがぶら下がるとるしの。天井からぶら下がるとる、「うわあ」いうてびっくりしたで。

男性：うん。

アシハラ：ほんで子どもも、「おかあちゃん、ここ動物園とちゃうんか？」言いよるさかい。へびがいんのやな。

男性：うん。

アシハラ：イタチや。

男性：うん。

アシハラ：イタチやら、ほんでから…、キツネかな、なんか知らんけどももう。何やかんやいっとたで、ここ。だってしゃあないわ。こんだけ木あってやな。

男性：うんうん。

アシハラ：うん。

――再生終了――

樹の雰囲気いうかイメージ、感じてもらえたでしようか。

あとね、僕、大阪は引ったくり全国ナンバーワ

ンという記録をずっと保持し続けて。そういうなかで、大阪はその引ったくりをテーマにちょっとドキュメントつくってみて。そのときに、引ったくりの被害者の人とか、ひったくりに関するいろんな方を取材して。

ただ、どうしてもね、やっぱり引ったくりしてる側の人間のインタビューが欲しかって、ほんである人通じて、「誰か引ったくりやってる少年、紹介してくれへん？」って言うて。なかなか紹介してもらわれへんかったんですけどね。

ある人を通じて、ちょっと紹介するわみたいなこと。で、ある日、いついつどこへ来てみたいな。それが、東大阪の町工場に夜中の8時ぐらいに来てくれみたいなね。ラジオの取材はたいてい一人で行くから、一人で行って、こんなんで行ってやばいなと思いつつ。結局そのときはちょっとお流れになったんですけど、またその別の機会に、ちょっと取材して。

まあこれ、引ったくりやってる子やいうのんで。ちょっと引ったくりOBの人やったんですけど、その人のインタビュー。

――再生開始――

ナレーション：引ったくり犯罪は、やる気持ちをエスカレートさせます。

ひったくり少年：僕は、引ったくりやりだしたんは、なんか、1回目2回目は、お金何ほでもええから欲しかったからやったんですよ。その、お金…に、お金が足りへんかったから、欲しかったからやったんですけど。その、何べんもやってるうちに、なんか、その、いっちゃん大きかった金額…が、出てきた金額が大きかったんが5万とするじゃないですか。で、5万出てきたときにめっちゃめっちゃうれしかったじゃないですか。ほんなら、次やったときにもし10万出てきたら、その倍の喜びがあるんやとか思って。ほんで、あ、このおばちゃん、引ったくったら、うわあ、ええ時計つけてるわ、ええ服着てるわ、うちのおかんよりええ服着てる、このおばちゃん、かばん引ったくったら、100万ぐらい入ってんちゃうかひよっとしたらとか、ばって思ったりして、なんか。人間で、10万当たったら15万欲しくなるじゃないですか。50万当たったら55万欲しくなるじゃないですか。なんかそういうあれが楽しくなってきた、はい。

て、はい。

ほんならなんか、僕ら引ったくりやってたときは、僕ら1グループじゃなかったんすよ。2グループ、3グループおったからね。なんか同級生の子らで、僕、制服に刺繍入れたときに、「どうしたん？ そんなお金」とかって。ほんで、こうこう言うたときに、「俺もそれ、ししよう」とかって。「俺、昨日やって10万当てた。やったでえ」とかって言ったときに、「うそやあ。ほんじゃ俺もっていつてくるわ」、「俺、昨日15」とか、「3人で15万」とか、そんなんで言い合ってたらみんな捕まったんですよ。

――再生終了――

非常に正直にインタビューに応じてもうて。大阪のほんまベタな少年という感じやったんですけど。

僕は今そういうようなことで、いろんな人と会うて、いろんな人からインタビュー聞くのが、それが自分の、仕事をしてて楽しいなと思ってやっています。今日僕もほんまつたないしゃべりで申し訳なかったんですけど、でも、やっぱりラジオというのは、僕は非常に面白いメディアだと思ってますんで、ラジオを知らない人は、またもう一回改めてラジオを聞いてほしいし、昔ラジオなじんどったという人は、またもう一度ラジオのほうに戻っていただいて、ラジオの魅力をもう一回聞き直していただければと思っています。

(講演終了)

田口：もっともとお話しいただきたいんですけど、実は番組、レギュラーでお持ちでして、これから局入りしなきゃなんないんで。

吉村：すみません。

田口：ちょっと質疑応答をとすることは。

吉村：もし時間ちょっとあれば。

田口：ええ、なんです、ちょっと時間の関係で、他の機会ということで。

吉村：そうですね。

田口：また番組のほうでまた。ありがとうございました。

(終了)